

心の断捨離

— 「とらわれない」ということ —

2014年11月13日

文化講演会「私が考える教養教育ーリベラルアーツとはー」より抜粋（その1）

次は四つ目、「とらわれない」ということです。これは学生さんに是非ともつかんでいただきたいんです。まず「相対化」ということですが、平たく申しますと、今住んでいる世界、見ている世界を広げること。学生さんに言うのですが、手っ取り早くは東京スカイツリーに上がると、何が見えてきますかと。自分が今住んでいる所が、より大きな広い展望のなかで、その位置がよく見えてくるわけです。レジュメには「位置を知る」と書いています。あとでもお話ししますが、こういう俯瞰、全体を見通す（パースペクティブ）、ということが非常に大事なんです。

で、何に「とらわれない」か、逆に言えば何にとらわれているかといえ、**常識**とか**通念**、あるいは時代時代の**風潮**とかですね。仏教学部の大先生がおられる前でこういう話をするのは恐れ多いことですが、「とらわれない」というのは**執着**あるいは**執着心**から離れることだと。世間の流行語になってはいますが、「断捨離」（断・捨・離）という言葉がありますね。仏教からきています。言うは易く行うは難しなんですけれども、配布資料（資料2）にもございますが、やはり常識とか通念にとらわれている、暗黙に、無意識にとらわれているんですね。物事への執着だけでなく、心の断捨離です。

では、とらわれていることから「解き放していく」ものは何か。それが学問であり、また真の教養とつながっ

てくる。「とらわれない」のですから、「リベラルアーツ」の意味合いがここに登場するわけです。本当の「自由」っていうのは、選択の自由といったことよりも、やはり「とらわれない」ということじゃないのかなど。では、「とらわれない」ためにはどういう力が必要かというのと、それには相対化する力（相対化の力）、というのが非常に重要になってくる。真の意味でのリベラル＝自由、そしてそのアーツ＝術（すべ）、これが「リベラルアーツ」と言われることのゆえんだらうと。

要約しますと、資料の右ページに太字で書いていますが、①相対化→②とらわれない→③本当の「自由」（リベラル）→④その術（アーツ）＝リベラルアーツ（教養教育）、というわけです。

ですから、私は会計学を担当していますが、別に会計学だけじゃなくて、やはり「教養としての××学」ということを重視して教育しているつもりなんです。（スライド9、10）

「史的俯瞰」ということ

－歴史のなかで－

文化講演会「私が考える教養教育－リベラルアーツとは－」より抜粋（その2）

五つ目に行きます。「史的俯瞰」ということです。先ほど俯瞰と申しましたけれども、歴史的にも俯瞰していく、これがまた非常に重要です。先にこちらの資料、右ページの一番下の資料3になりますが、ご覧下さい。そこに書いていますように、ここで私がお話ししている「教養」とは、カルチャーセンターなどに通って身につけるようなものでもなければ、むしろ豊富な知識を披露するとい

ったものじゃない。教養＝幅広い知識、といったイメージがあるかと思うんですけども、真の「教養」というのはそういうものじゃないんですね。

それから、何かすぐに役立つというものでもないんです。いわば漢方薬のような感じで、じわじわと体質を改善していく。そのかわり、すぐには役立たない。けれども、やがてより大きな力となって役に立つんですね。このいわば体質を改善していく漢方に似た効能です。だから、真の「教養」というのは、生き方に深く関わってくるものでないといけない。冒頭で語学学習というのは、私がここでいう教養とは違うよ、ということを申し上げたわけなんです。

今日、役立ち教育ばかりが重視されています。その背景にある今日の社会事情をふまえますと、それも大切な教育ではありますが、それが最優先になっている。言葉は悪いですが、大学がキャリア教育、職業訓練校になってきている。それに比して、ここでいう教養教育、リベラルアーツ教育が重視されなくなってくると、これは大学教育、「大学で何を教育するか」という本来のあり方にとっては非常に危険じゃないか、私はそう思っております。

繰り返しになりますが、歴史のなか、文脈でとらえていくということが、これまた教養教育にとって非常に重要なわけで、私のテキスト（『社会のなかの会計』NHK出版）のコラムですが、歴史の眼はまさに「社会の中で自己の位置」を知るための見通しや洞察を与えてくれるわけです。（スライド11, 12）

フクシマと水俣と沖縄

－「つなぐ」ものの眼－

文化講演会「私が考える教養教育ーリベラルアーツとはー」より抜粋（その3）

次は、六つ目です。フクシマ、原発問題、水俣これは悲惨な公害問題、そして沖縄は米軍の基地問題です。これ、それぞれ別個の問題なんですか。そういう問いかけです。それが「教養」というものの教育とつながってくるんです。

先ほどの H₂O のたとえで申しますと、それらの問題は水や氷や水蒸気のようにそれぞれ違ったものなんですかと。そうじゃないんじゃないか、それらに何か共通するもの（構造）があるんじゃないかと。答えは、時間の制約でここでは申しませんが、少なくともそれを横につないでいる、何か構造的な問題がある。まさに H₂O という分子の結合関係は同じであるように、それらに共通して存在する構造的な問題があるわけです。

フクシマと水俣と沖縄の問題は社会経済の問題ですが、タテ別でなく、ヨコに共通してつながっている構造的な問題があるわけです。現代の社会のあり方を考えていく上で、この三つは別個（タテ）の問題ですかという問いかけは、一つの大変重要な教材になります。「私が考える教養教育」の格好の問いかけ（教材）なんです。（スライド 13）

（以上、その 1～3 は駒澤大学仏教行事・文化講演会「私が考える教養教育ーリベラルアーツとはー」より）

※文中のスライドはHP「講演」コーナーに掲載。